

科学の対象としての文化・再考：文化の社会学序説

ましこ・ひでのり

1. 研究対象としての「文化」

以下、展開していく議論でもちいられる「文化」とは、

2人以上の人物が共有する行動様式、およびそれにともなう価値観。ヒトの行動のうち、生得的にプログラミングされている様式以外は、この「文化」の産物。拡張解釈することで、ホ乳類や鳥類の地域差・集団差、ヒトとほかの種の体系化された意志疎通なども、これにふくめてもよい⁽¹⁾。

という定義にもとづいている⁽²⁾。

要は、種としての本能的行動以外はすべて文化的行動（ないしは、その派生物）であるとの見解である。異論のある読者がほとんどであろう。しかし、生物学的、そして人類学的にもっともひろい定義をかんがえるなら、こうなるよりほかない。「低劣な行動様式／価値観までもふくめるなど、知的野蛮だ」とか、「文化をヒト以外にみとめるのは、いさみあしだ」とか、「2人だけの共有点など、次世代に継承されていかないような行動様式までふくめるのは、文化概念のひろげすぎだ」といった批判が、きこえてきそう。しかしそうした反発とは、以下論ずるように、読者の「文化」概念がせまいから生ずる感情とおもわれる。いささかきついいかたをゆるされるなら、読者の「趣味」でもって「文化」概念をせばめているから生じる反感なのであり、新フロイト派的解釈をするなら、一種の防衛機制であるかもしれない。

それはともかく、誤解をうけないように、最低限の補足説明をくわえておいたほうがよからう。「2人以上の人物が共有する行動様式」としたのは、個人の内部だけでとじられた行動をはずすためである。「文化」というからには、共有されている必要があり、他者が了解可能でなければならない。その意味では、音声言語や手話などの最小限の共同体を想起されるのがふさわしい。生得的行動以外を全部「文化」概念にいれてしまえば、分析概念として、つかいものにならないという、理論操作上の意味もある。みかたをかえれば、外部から解読可能（decodable）であり複数の主体に共有されているということは、生物学の概念を借用した「ミーム（meme、文化的遺伝子）」にあたるものがある。継承可能ということである。

したがって、ニホンザルのイモあらいとか鳥類で報告される「方言」差などはもちろん、霊長類研

究者たちがチンパンジーやボノボなどと記号操作機械や手話などをつかって意志疎通をはかっているときの媒体／身体運動とか、猟犬・牧羊犬・警察犬・盲導犬などを頂点としたイヌ／ヒトのやりとりも、以上の文化概念にふくめてよかろう。なぜなら、地域差がなんらかの激変によって消滅したりムレが死滅したりすれば、動物たちの行動様式も激変ないし消滅するわけで、現時点での分化が観察できなくなるという意味で「文化」だろうし、ヒトが高等猿類やイヌ科（オオカミもふくめた）に意識的接触をやめた時点で、種をこえた意志疎通もおわりをつけるだろうから⁽³⁾。

本稿が、なにゆえ以上のような最広義の文化概念をとるのかは、以下の議論であきらかにされていくが、一部結論をさきどりしておこう。それは、既存の研究の対象領域としての文化概念が非常にせまく設定されており、逆にいえば、広大な沃野が当然のように放置されてきている現状に反省をせまることである。

後述するように、制度化された、いわば「高級文化」以外を意識的に照射してきた、いわゆる「カルチュラル・スタディーズ」といわれる潮流にしてからが、以前の高踏的なアカデミズムの陰画のように、せまい文化現象にしかとりくまないのに、「文化研究」と僭称している始末である。「いわゆるカルチュラル・スタディーズがせまい領域しかあつかつていないというのは、事実誤認だ」という批判がきこえてきそうなことは、先刻予想済みである。たしかに、「カルチュラル・スタディーズ」のいない私たちは、以前の文化研究よりも、ずっとひろい領域を意識的にカバーしようとしている。しかし、前述したように、「文化」は生得的次元からはずれる、共有された行動様式総体なのである。だとすれば、「カルチュラル・スタディーズ」の射程は自称をうらぎって、文化概念がせますぎるといえよう⁽⁴⁾。

本稿は、科学の対象としての「文化」を再検討することにより、本来的な、自称と内実が一致した「文化研究」を提案するところみである。もちろん、だからといって、読者の「趣味」による「文化」概念、それにもとづく研究の意義を否定するものではない。というよりも、本稿のような見解は非常に少数派に属するはずであり、既存の「文化」概念にそった認識・研究をあらためねばならないような圧力は当面でてこないとさえおもわれる。本稿の主旨は、既存の「文化」概念が、あくまで特定の時代背景にそった制約ある認識の産物であり、今後も同様の認識が不動である可能性はひくいことの論証である。「大衆文化」とか「若者文化」など下位文化の隆盛が無軌道な資本主義の展開でもたらされたといった、うしろむきの姿勢でよまれないことをのぞむ。もちろん、本稿が、そういった下位文化を称揚する一連の「ポスト・モダニズム」の産物と誤読されることもものぞまない。本稿は、「近代社会でくりかえされる社会現象ならすべて、構造を記述分析する意味がある」として、論者の「趣味」による序列化／断罪等を徹底的に禁欲する社会学のたちばからみた文化記述論なのだから⁽⁵⁾。

2. 「下位文化」「大衆文化」の再検討

「下位文化」とは、本来「上位文化」との対概念ではない⁽⁶⁾。したがって、「下位文化」は、非「主流文化」とはいえても、けっして非「高級文化」ではない。上位概念の、たとえば西欧文化総体内部

に複数の「下位文化」が共存するといった、包含関係の大小関係の次元にすぎない。

しかし、たとえば通常「サブ・カル（チャー）」といった表現がもちいられるとき、それは中立的な概念であろうか？ これは容易に反証することができる。

たとえば、五線譜をもちいた記譜法を前提にしたアカデミックな西欧古典音楽および「現代音楽」とよばれる領域は、帝国主義時代の成熟期にあたる 20 世紀には世界化された「普遍性」をかたっていたとおもわれるが、ともかく西欧文化の一部だろう。いいかえれば、西欧文化の下位文化であり、音楽文化⁽⁷⁾の下位文化でもあろう。上位概念をどう設定するかにもよるが、ともかく、西欧古典音楽および「現代音楽」が下位文化の一種であることは、自明の事実であるはずだ。たとえば、欧州大陸以外で、住民の過半数が西洋古典音楽を日常的にたのしむ空間があるだろうか？ イングランドの都市労働者がクラシックの演奏会に正装して日常的にいくことがおそくないだろうこと、おきにいの現代音楽の CD を毎日のようにきくことがないだろう構造は、日本の都市労働者や地方の農民については、一層あてはまるのだから。

しかし、西欧古典音楽および「現代音楽」が下位文化として認識されたことがあるだろうか。すくなくとも、そうよばれたことは皆無にちかいのではないか？ これは、よくかんがえると奇妙な事実である。なにゆえ西欧古典音楽および「現代音楽」は「下位文化」よばわりされないのか？ 精確な論証には、相当の材料をそろえる必要があるが、基本的には、西欧近代文明が普遍的な価値をもっていると僭称し、そこで維持されてきた古典芸能は当然普遍的な文化であるとの認識が、世界の選良たちに注入され定着したとみてよかろう。西洋古典音楽用の楽器／編成によらない楽曲・声楽は、西欧のものでも民俗音楽と分類され非主流派あつかいをうけるが、西欧以外の音楽は、在来の古典音楽用楽器／編成によったところで「民族音楽」とよばれることになる。あたかも西欧には「民族」が存在しないかのようである⁽⁸⁾。また非主流とみなされていた音楽文化も、市場が肥大化し体制化していくと、西洋古典音楽用の楽器／編成にちかいかたちをコピーするようになり、すくなくともアカデミックな人材養成を制度化することになる。自生的／即興的だった民衆あいての音楽が、記譜法をそなえ、ブランドとしての著作権を主張し、大学等でレクチャーする教授たちがパフォーマーや作曲家を養成するようになる⁽⁹⁾。要は、大半の自生的音楽文化は、西欧古典音楽の形式にすりよるかたちで制度化し、延命ないし再生しているといえよう。そうすることで、単なる「下位文化」ではなくて、普遍的な価値をもっているかのように演出していくのである。

ともあれ、西欧古典音楽のように「普遍的価値」をおびてしまえば、それを包含する上位概念との対比が無視されて、「下位文化」という客観的な位置づけが消滅してしまうといえよう。もちろん、これは音楽文化にかぎらない、舞踊であれ、演劇であれ、スポーツであれ、文学であれ⁽¹⁰⁾。

このようにみれば、「サブ・カル（チャー）」という呼称は、客観的にくみだされた操作概念とはいえない。むしろ「大衆文化の成熟のなかで一段進化＝深化した、マニアックな趣味＝細分化した分衆文化」といった含意がみてとれよう。せいぜい「非主流文化」ないし「非正統文化」といった、つきはなした操作概念としてもちいられているのであれば、マシな方といえる。ある意味、日常的な用法のイメージが強固すぎて、既存の呼称のままでは、操作主義的な運用ができないのである⁽¹¹⁾。

また、「カルチュラル・スタディーズ」派のおおくが、そこに「抵抗」や「対抗」をみてとっているのも、よしあしといえよう。かれら／かのじょらは、「ゆたかな」先進諸地域の都市部における大衆がうみだしたエネルギーに、積極的な政治的／文化的意義をみいだしており、体制的な上下概念から自由に評価をくだしているつもりである。しかし、慎重な論者たちが自覚しているとおおり、そういった議論のおおくには、論者の投影を前提とした本質化／理念化がからまっている。当事者と記述者の政治性のミゾといった問題、参与観察とは一体なんなのか、といった認識論上の深刻な問題も当然みのがせない [上野／毛利 2000：117-24]。

では、「高級文化」と対概念とみなされている「大衆文化」はどうであろうか？ 一般には、「資本主義ないしは前資本主義体制がもたらした大都市部における大衆という層を前提として、大量消費される文物／表現の市場ないし実態」と定義することができよう。「高級文化」と対比させるなら、幕藩体制下にあっては、能狂言に対して歌舞伎／浄瑠璃であり、漢文学に対して俳諧／戯作本であり、宮廷音楽舞踊に対して遊里の歌舞音曲などがあげられる。近代日本では、西洋古典音楽に対して大衆歌謡、岩波文化に対して講談社文化、乗馬／ヨットと野球、ブランデーに対して焼酎など、さまざまな文化項目をあげることが可能である。無論、時代がくだるにつれて、前者自体が大衆化したものがおおいが、おおくの対応関係は、経済的階級／階層にともなった消費市場の質／量のちがいであろう。前者は市場規模が極端にちいさく、たかい階級／階層あいての特殊な市場である。後者は19世紀以降の大都市大衆の欲望と大量生産を前提にしているため、薄利多売の大規模市場である。そして19世紀後半以降は、欧米の文物の階級／身分差の無視をともなった「洋物」の拝跪、という普遍的現象もみのがせない⁽¹²⁾。

もちろん、こういった市場規模のちがいは、「作品」としての「一品生産」を究極のかたちとした「高級文化」と、「複製技術」による大量生産による「大衆文化」という生産様式／消費様式とよみかえることが可能である。前者のばあい、「一品生産」による「作品」の価値＝意義を充分に理解する顧客（裕福で文化資本もそなえた）が前提であり、後者では、大量生産で可能な品質水準で充分と感じる大衆が前提となる。前者の究極の生産者は「高名な作家」であり、後者の生産者は機械にはりついた無名の労働者、あるいは「使い捨てのタレント」である。いいかえれば、前者のばあい、生産者／消費者とも、しるひとぞしる「ひとかどの人物」で代行不可能なのに対して、後者のばあいは、生産者／消費者とも無名であり、しかも「交換可能」な存在として「量的存在」「流体」としてあつかわれるわけだ [ましこ 2000]⁽¹³⁾。

では、たとえば鶴見俊輔の『限界芸術論』などで提起された「文化」領域はどう位置づけるべきだろう。「純粹芸術」(pure art)とも「大衆芸術」(popular art)ともことになって、生産者／消費者いずれもが非専門人という図式はふるくなっているといわれる。しかし同時に、制度化された厳格な訓練を通過していくわけではないマンガやロックの表現者をかながえるうえで有益なわくぐみであることもたしかだろう [上野／毛利 2000：215]。現在われわれが大衆文化とかサブカルチャーとして認識する領域は、鶴見のいう「限界芸術」と「大衆芸術」のあいだに位置しているというのは、たしかに首肯できる [同上]⁽¹⁴⁾。こういった領域では、制度化された厳格な訓練を通過しさえすれば身分を

保証される、といった市場は存在しない。パフォーマンスしながら（アルバイトなどでくいつなぎながら）、人気を獲得するまでねばらねばならない稼業といえよう⁽¹⁵⁾。

3. 「生活文化」がてらしだす、「文化」概念

そして、わすれてはならないものとして、「生活文化」というきりくちがある。通常、「文化」というときにイメージされているのは、なんらかの創造的な表現行為が前提となっている。それが「高級文化」であろうが「大衆文化」であろうが。しかし、日常的にしる非日常的にしる、ある時空でくりかえされる生活様式自体が「文化」にほかならない。「多文化社会」とか「異文化間コミュニケーション」といった表現が、そのことを端的にあらわしているといえよう。それにもかかわらず、既存の研究のほとんどは、文化現象を「表現行為」ないしはその「消費行動」とみなし、しかも「対象化するにたるもの」ととらえることを疑問視してこなかったのではないか？ するスポーツ／みるスポーツ（あるいは、かけるスポーツとしての公営ギャンブル）はもちろん、囲碁／将棋、各種文学、視覚表現、聴覚表現、などである。いってみれば、「見聞きするにあたいするパフォーマンス＝非日常空間」が前提としてあり、それを享受＝消費するか、まねてたのしむかという形式こそ、「文化」だと信じてうたがわなかったはずである⁽¹⁶⁾。しかし、そういった「パフォーマンスの消費」以外に、膨大な「文化的行動」がくりかえされ、しかも、一度たりとも対象化されることなくきえさってきた現象は、それこそ、かぞえきれないであろう。知識人によって論じられたことがないからといって、そこに「文化」が不在であったわけではない。もちろん、論ずるにあたいしない現象だったと断言できる保証など、どこにもない⁽¹⁷⁾。そして「それでもなお、学問の対象として第一にかぞえあげられるべきなのは価値ある非日常的パフォーマンスだ」というなら、「多文化社会」とか「異文化間コミュニケーション」といった表現が自明の前提としている「生活文化」を、「とるにたらない＝学問の対象たりえない」という軽視する選択をおこなっていると自覚し、かつ公言すべきであろう⁽¹⁸⁾。

さらにいえば、研究対象としての「生活文化」というわくぐみは、なにも、人類学／教育学／社会学、あるいは言語学にのみ意味のあるものではない。前述したような「下位文化」という原理的＝原則的な操作概念とからめるなら、ある国民、ないし民族、あるいは教徒たちに共有されている「生活文化」との対概念こそ「下位文化」ともいえるからである。特定の層にのみ共有／実践される知識／行動／価値観こそ「下位文化」であり、大多数の層に共有／実践される知識／行動／価値観こそ「生活文化」と、理念型をたてることは、きわめて生産的といえよう。この視座によれば、式服として着物草履すがたは「生活文化」だが、日常的な着用は「下位文化」といえる。同様に、「洋服」を日常的に着用することは「生活文化」だが、自室に西洋画をかざり西洋古典音楽を毎日きくことは「下位文化」とみなすことが可能であろう。

また、衣食住など生活文化の基軸にあたる部分は、「洗練された（と体制が認定してきた）」ものだけが「文化」としてとりあげられてきたし、日常的な技術学的領域は、「家政学」として、わかい女性（将来の主婦役割を自明視されてきた）のまなぶものという認識が、なかば当然視されてきた

(「良妻賢母」イデオロギー)。しかし、そういった認識自体が、制度化した「高級文化」を称揚する価値序列の産物であり、また女性差別的な価値意識の端的なあらわれといえよう⁽¹⁹⁾。

ちなみに、文化庁があらたな存立基盤として法制化した「文化芸術振興基本法」(2001年)の第十二条が、「国は、生活文化(茶道、華道、書道その他の生活に係る文化をいう)、国民娯楽(囲碁、将棋その他の国民的娯楽をいう。)並びに出版物及びレコード等の普及を図るため、これらに関する活動への支援その他の必要な施策を講ずるものとする。」と規定していることは、皮肉である。形式的に「生活に係る文化」を「生活文化」としているものの、具体例としてあげられたものが「茶道、華道、書道」であることは、策定者たちの意識水準と範囲を端的にあらわしているといえよう。それが時代錯誤的に偏向しており、しかも想像力の射程がきわめてせまいことはいうまでもない。それらが日常生活そのものである層は、人口のどの程度をしめるのだろう。

また、世俗的な「文化」概念を端的にあらわしているのは、実は文化庁内部の組織名自体といえよう。長官官房のなかに著作権や国際交流をあつかう組織があるものの、具体的文化政策をしきっている「文化部」の下位単位は「芸術文化課」「国語課」「宗教課」であり、文化財保護や美術品などを担当する「文化財部」のなかも、おしてしるべしである。このなかで「国語課」は日常的な「生活文化」をとりあつかっているようにみえるが、それが国内の言語現象を統制すべき対象として把握する部局であることは、いうまでもない。独立行政法人の国立国語研究所などの調査機関が、国策からは自律した実証研究をすすめていることはもちろんだが、政策的意図としては、あきらかに「国語政策」に資する調査が予定されている。多様な日本列島上の言語現象の把握ではなくて、ヤマト系日本人の民族文化としての「国語」という本質化が自明視されているからこそ維持されている研究所にほかならない[ましこ 2001b]。

4. 科学的対象たりえる「文化」の諸相

つぎに、今後真剣に検討すべき「文化」現象をいくつか具体的にとりあげることで、以上のべたような構造の問題点を、より鮮明化してみよう。

まず、ヒトという種の独自性という意味では、セクシュアリティやジェンダーにかかわる諸現象を対象化することが不可欠である[加藤 1998][赤川 1999][遠藤 2000][荻野 2002]。同性愛や性転換志向をふくめた性意識は、基本的にヒトに独特の現象であり、しかも「出産文化」(杉立義一)をふくめた広義の性行動/制度のほとんどが生得的な行動様式とは別次元に属することは、いうまでもない⁽²⁰⁾。男性性や女性性を、性ホルモンを軸とした「本能」が決定するといった生物学的な本質主義的議論がはびこり、育児はもとより性風俗や病理現象まで「しかたがない」といった合理化がひろくまかりとおってきたが、およそ非科学的でありイデオロギッシュといえよう。ある時空の特定の集団だけが共有する価値観と行動様式にほかならないという、ある意味、「多様性=普遍的構造」であることを確認しつつ、「性文化」が記述/分析される必要がある。「食欲/睡眠欲/性欲は、ヒトの三大本能」といった俗論は、摂食障害/睡眠障害/性的不能やセックスレスカップルなどの現象をみてもわ

かるとおり、例外的少数＝異常というよりは、むしろ一定数かならず存在する現象とみるべきなのだ。その意味では、男性至上主義にねざした性暴力やセクハラなどの現実さえも「文化」として分析可能である [ましこ 2000, 2002b]

こういった視点にたったばあい、障害者の売買春を「サブカルチャー」だなどと特別視する視座はナンセンスである [伊那 1999: 8-10]。障害者の日常生活のおおくが、「健丈者」の日常文化と異質であるか、異質であるほかないようおいこまれているからである。重度の身体障害をもつ層が、事実上屋外にでられないようくみたてられた、「健丈者」中心の「障害だらけ社会」の住人は、この社会学者もふくめてあらゆる意味で鈍感である⁽²¹⁾。手話や点字などの媒体もふくめて、「隣人」たちの異文化をしろうとしない、あるいは、みおとしたまま生活がおくってしまうのである。あいてにこえをかける、という行為が無意味な、ろう者たちは、かたをたたく、あるいはつくえをたたくといったかたちで、あいてにしらせる。かたのたたきかただけで聴者であることがわかるというから、日本列島上に異文化が共存していることはあきらかだ。盲人が依存せずに生活可能な漢字表記を、日本語ワープロソフトの機能をつかわせることでしいる晴眼者文化とか、聴覚が活用できない、ろう者にまで「口話（いわゆる読唇術）」を強要する聴者文化（聾学校教員）なども特記しておくにあたいするだろう [ましこ 1998, 2000, 2002ab] [あべ 2002]。

美容整形をふくめた身体感覚の動態も、すぐれて「文化」的現象であることは、いうまでもない。摂食障害を少数の病理的現象とみなすような態度は不毛であるし、さまざまな動機による食餌制限の盛衰、食を芸術行為とみなす態度を一方の極として、他方にある食事の軽視まで多様性を無視できない [ラプトン＝無藤／佐藤訳 1999]。化粧、ヒゲそり／脱毛処理、カツラやスキンヘッドをふくめたヘアメイク、ピアスをふくめた装飾品／衣類など、ヒト特有の行動様式、時空／集団ごとに激変する身体管理は、おびただしくある。「スポーツをしなければ」「節制しなければ」「一日 30 品目たべなければ」「健康と美容は至高の価値」といった「健康志向」「清潔志向」意識自体が、現代の都市生活者に特殊なものであり、なんら普遍的な価値ではないことに、どの程度の市民、いや知識人自体が自覚的だろうか [小野 1997] [ホイ＝椎名訳 1999] [上杉 2000] [米山 2000] [佐藤ほか 2000] [荻野 2002]。無論、こういった身体性へのこだわりに対応するかたちで隆盛をほこる、スポーツ産業、美容産業、健康産業のよってたつイデオロギーも重要である。

文化として注目されることがおおい言語現象においても、携帯メールでの「顔モジ」、「2ちゃんねる」文化、「語呂あわせ」や4音短縮語など、単なるサブカルチャーと放置しておいていいとはおもえない広範な日本的現象がたくさんある。これらは、日本語漢字の特殊性などを考慮にいれないかぎり理解不能であるばかりでなく、かなりの程度、現代日本の日常文化の実態を反映した現象である⁽²²⁾。

いささか卑近な領域もふくめるなら、ラブホテル／風俗店／飲食店／喫茶店をふくめた店舗などの命名、競走馬／プロレスラー／芸能人などの命名／呼称、薬品／電化製品／輸送機関をふくめた商品名、商店街やビルの呼称など、固有名詞の生成原理は、地域文化や階層文化もからんだ、列島の言語文化をうきばりにすることであろう。音声実態とは遊離しているモジ表現上のジェンダー表現、英米語の「つづり字発音」やその延長線上での外国語全般にみられる「誤読」現象、恣意的な漢字表現の

実態や「日本化」の典型といえるカタカナことばの生成状況など、日常的＝微視的な言語現象には、まさに「文化的」要素にほかならないのであって、実は、言語学者の個人的趣味で、あつかう／あつかわない、といった瑣末な次元ではない⁽²³⁾。「ただしい日本語」とか「ただしい敬語」といった、非言語学的で不毛な規範主義に精力をそそぐいとまがあるなら、以上のような諸現象に明快な分析わぐみを提供し、しろうとの疑問や混乱にこたえるデータを用意する責務があるはずなのだ⁽²⁴⁾。そして、公教育空間での国語科が単なる実用的技能の伝授装置ではないとするならば、こういった日常的言語現象を明快に理解しうるような研究成果を教員・成人・児童が利用可能な形式・水準で保障することは当然であろう。

もちろん、「文化」として対象化すべき領域は以上のような身体／言語といったものにとどまらない。紙幅の関係で詳述することはひかえるが、うらない／カルト／オカルト／エセ科学信仰、冠婚葬祭をふくめた各種行事を構成する「しきたり」、「恋愛文化」、観光をふくめた余暇、生徒文化や教員文化をふくめた学校文化⁽²⁵⁾、企業文化や組織原理、市民／業務遂行者の廃棄／廃熱行動、環境意識と人権意識、経済行為や紛争解決システム⁽²⁶⁾、産業技術の進歩／伝播／混交、……など、それこそ枚挙にいとまがない⁽²⁷⁾。これらはすべて、時空をたがえることで、ことなっただかたちをとる。かりに物理的には同一の事態が生じていたにせよ、すくなくとも当事者の把握と処理方法がちがってくるのである⁽²⁸⁾。こうした多様性こそヒトの「文化」そのものであり、そこには、まだまだ広大な「未踏の沃野」がひろがっているといえよう。

5. おわりに

ある経済学者は、「文化を経済学的に分析した『文化の経済学』の分野は今までに存在せず、著作もなかったよう」だとし、「実際、筆者はインターネットなどで検索を試みたが、そういった著作を見出すことはできなかった。『文化の経済学』の著書は、ひょっとしたら世界中でも本書以外に存在しないかもしれない」とのべた。そして、「文化は芸術よりずっと広い概念であるから、本書のような目的をもつ文化人類学と同じように『文化経済学』という名称をつけたほうが適切である筆者は感じる」としてしながら、「文化経済学」という名称をあえてつけた。既存の「文化経済学」という名称が、「芸術活動などの経済分析」として理解されている状況に配慮したからである〔荒井 2000：181〕。実際、日本の「文化経済学会」(<http://www.jace.gr.jp/gaiyo.html>)をはじめとして、世界の「文化経済学 (cultural economics)」もそう理解されているようだし、「文化政策学」「文化産業論」といった隣接分野でも、同様の把握が自明視されているようだ。「見聞きするにあたいするパフォーマンス＝非日常空間」という文化イメージがいかに強固であるかをものがたっているといえよう。

いささかきついいかたをするなら、「カルチュラル・スタディーズ」が文化研究の最重要部分をすべてになっているかのように僭称しているのと対照的な意味で、「文化経済学」は「文化」を恣意的に規定している。おそらく、考古学ブームというかたちでの地域おこしには成功していない発掘調査とか、大学テキストとしてしか流通しない出版物、報酬をもとめることなど最初から考慮していな

い地域の活動やインターネット上の情報のやりとりなど、経済学的分析にあたいしないとみなしていることだろう。それは「集金能力／集客能力あってこそその芸術」といった、きわめてなまぐさい「文化」イメージにほかならない。「(芸術家さえ)カスミをくって、いきていけるわけではない」ことは現実でも、「(生活者も)パンだけでいきているのではない」のは事実である。「文化」が「芸術よりずっと広い概念」であるということは、結局のところは「カネのなる木」=投資先といった観点でしか「文化」を把握しない、資本依存症 (capitalism) 患者の貧困な想像力をてらしだす。そして、アカデミズムを中軸とした文化の対象化は、そこまでなまぐさくない一方、自身の恣意的な序列意識に無自覚か、ひらきなおってきたといえよう。

本論考は、その意味で、既存の「文化の社会学」の大半も無自覚におちいついた「文化」概念の批判的のりこえの序章にすぎない。しかし、本研究所在が「人間の織りなす多様な文化について総合的に研究し、その研究成果を公表し、社会の発展に寄与する」ことを目的として設立維持されていることをかんがえれば、単なる「知的遊戯」以上の意義をもつはずである。

注

(1) 「文化」については、ヒトという種が、遺伝子にあらかじめかきこまれた生得的行動様式をうしなっているという普遍的現実=根源的存在をうめる装置であるとの見解がある。いわば、サルが未熟児のまま誕生し、未成熟のまま成体となったのがヒトであるとするL.ボルクの「胎児化」説に依拠したA.ゲーレン「欠陥生物」説などが代表的といえよう [ゲーレン=亀井/滝浦他訳、1970:138-43]。

同様の議論は日本でも、岸田秀などが展開しているが、こうした仮説には心理的抵抗感がつよいらしい。たとえば、ある精神科医は、敵視する教育論をつきくずすために、「岸田の非科学的著述で河上は、科学的装いをとることができると思ったのであろうか。仮に百歩譲って岸田の著述を認めるにしても、彼の理論は真理ではなく説明仮説として叙述されているものであるから、本能が壊れた欠陥動物が文化という幻想を共有することにより絶滅を免れるという岸田の説明は、実体を指すものではない」といった論理展開をしている [高岡 2002:175]。しかし、こういった論理は、ゲーレンらの議論をすべて非科学的妄想としてきってすてる、といった知的野蛮を戦略的にえらんでいるのか、無知であることに無自覚であるのか、どちらかであろう。また、自然科学の観察や証明でさえ実はそんなに簡単な実体論ですまないことは、もはや衆知の議論である。説明仮説でもって議論をくみだてるほかない領域は、人文社会科学の大半をしめるといってもよからう。

高等無尾猿類にも文化が観察されることは常識に属するが、ヒト以外に「多様な文化」が存在しないらしいことも、ほぼ確実である。逆にヒトの文化は、時空をたがえるだけで千差万別、それこそ同一種とはにわかには信じがたいほどのバラつきが普遍的であることも、自明であろう。こういったヒトとそれ以外の「断絶」を説明する説得的な仮説のひとつとして、ゲーレンらの議論は無視できるはずがない。もし「本能が壊れた」という表現がうけいられないなら、たまたまうまれた既存の言語文化に大半が適応できるという「生得的能力」(Language Acquisition Device) で説明をこころみたチョムスキー派の言語的社会化論にならって、CAD (Culture Acquisition Device) を仮説的に想定してもかまわない。しかし、周囲の文化を諸個人が内面化することで生得的行動様式の欠落部分をうめていることにはかわりがなからう。ヒトとは、使用者が具体的に入力しないかぎり、まっさらで作動しない汎用ソフトになぞらえてもいいかもしれない。

(2) 本来なら、既存の「文化」の定義を研究史的に一瞥すべきであろう。本稿では、割愛するが、議論の大勢には影響しないはずである。かんがえられる最広義の文化概念だからだ。「文化」概念の通史的概観につ

いては、[生松 1968] [伊藤 2000] など参照。

- (3) 逆に、言語的社会化＝文化的初期化がはじまっていない乳幼児は、文化以前の存在であり、ある意味、ペット以上に距離があるといえよう。かのじょら／かれらの反応には、時空によるしほりなど存在せず、したがって文化的差異など存在しないはずだから。
- (4) 後述するように、「カルチュラル・スタディーズ」の大半は、「文化の政治学 (cultural politics)」などと改称すれば、非常に一貫性のある運動といえる [上野／毛利 2000: 46]。しかし、「文化研究」と自称しているかぎり、「誇大広告」といえよう。[吉見 2002] [吉見編 2001] なども参照。
- (5) もちろん、時空を近代以降（およびその前史）にかぎるのは、社会学という知の体系が近現代社会の解明にあるからであって、文化の科学というばあいには前近代がふくまれるのはいうまでもない。人別改帳や教会資料をもちいて前近代の民衆の日常空間とその変動を復元しようとした社会史などは、きわめて社会学的な視線をそそいでいるといえる。

ちなみに、論者の「趣味」による文化の序列化／断罪という問題は、実は存在被拘束性という次元で、大半の研究者にとって「ひとごと」ではない。なぜなら、第一に、研究＝記述／分析過程と表現行為は、対象への権力行使にほかならず（研究されることをのぞむ主体など、動植物にあるはずがないし、ヒトも例外的存在である）、第二に、ある現象を研究対象からはずすこと（関心をもたないこと、無視／黙殺すること、断念することなど）、研究成果を公表しないことなども、権力行使だからである。ある文化現象をとりあげるといえることは、称揚するにせよ断罪するにせよ価値判断がともなうわけで、文化主体へ権力行使にほかならない。そして、特定の文化現象をとりあげないこと（公表をひかえることもふくめて）も、消極的に価値判断をおこなっており、結局は社会の序列構造に間接的に加担しているのである。とりわけ、人文系の研究者の大半がとりくんできたであろう「高級文化」や「民族文化」について、研究行為を自明のごとくかんがえるのは、無自覚な政治性というほかない。知的選良が「高級文化」や「民族文化」を積極的にとりあげ、またそのことへの報償として、経済的／社会的地位をかちえてきたこと、文化序列を再生産してきたことは、まさに政治にほかならないからだ。

- (6) しかし、「下位文化 (subculture)」を「ある文化より下位にあって、これに従属したり、準じたりする副次的な文化の現象や領域」とみなす見解はねづよい [上野／毛利 2000: 107]。また、伊那正人は、『『メイン』に対する『サブ』、すなわち『下位』という位置づけ』とか、『『メイン』としての政治・経済・社会のシステムからある程度独立し、自律性を持つものの、それに依存、従属、ないしは規制する文化』といった、奇妙な定義をおこなっている [伊那 1999: 2-3]。日本における西洋古典芸術自体が、まさにこの定義にふくまれてしまうことについては、第二節後半で詳述するとおりである。

より中立的な位置づけとしては、ミシェル・ド・セルトーのつぎのような記述がある。

サブ・カルチャーとカウンター・カルチャーは区別しなければなりません。前者は下位グループとかマイノリティの文化をさしています。[ド・セルトー＝山田登世子訳、1990: 228]

- (7) その時空の範囲をどう把握するかで複雑な問題が生じようが、ここでは詳述しない。
- (8) ドイツ文化圏を中心に「民族文化」を強調する伝統はねづよいのだから、まさに自己矛盾といえよう。逆に、東アジアの例でいえば、強烈な民族意識をもってきた日朝中文化圏は、民族的な古典音楽をそれなりに維持しつつも、国歌の演奏は、まさに西欧古典音楽の記譜法と編成にのっとった形式に追随している。外交儀礼の相手の主軸が西欧諸国であったという経緯はあるにしろ、音楽文化的には完全に屈服したかたちになっているといえよう（「創られた伝統」そのものである「君が代」の生成過程と演奏様式を想起）。民族的な古典音楽の維持も、所詮は西欧のオリエンタリスティックな視線に呼応したもの、つまり民族の独自性を対抗的に強調するための「伝統」にほかならず、国民／大衆の日常生活のなかには、すでにそういった要素はほぼ一掃されているといっても過言でない。日本でいえば、正月や結婚式のときだけの「邦楽」とか。大学で音楽学専攻といわれたときに、「邦楽」継承者をイメージするききては皆無にちかいはずである。「邦楽」とは、日常的な身体性からみても、まさに自己矛盾にみちた表現といえよう [ましこ 2002a]。

- (9) 本来、記譜法とは無縁であったはずのジャズやフラメンコが、学部や専門大学院、国立の舞踊組織など

を確立するなどの制度化、ロックやポップスとよばれる大衆音楽がビジネスとして制度化するなど。これらのおおくが、北米におけるアフリカ系住民、南欧におけるロマ系住民など、被差別集団の身体文化を源流にもっていたのに、それが主流派住民の大衆市場に認知されることで「安全化」していったことは、みのがせない。

- (10) スポーツが普遍化するためには、欧米の「承認」が不可欠である。オリンピックの種目になりえた、「Judo」「Taekondo」、世界に道場を展開できた「Karate」などはその典型といえよう。その際、フェンシング／レスリング／ボクシングなどで当然視されるレフリーやジャッジによる採点制度など、制度化された西欧格闘技の形式にすりよったことはいままでのない（もっとも、本家本元と自認している柔道／空手の本国＝日本の大衆はもちろん、関係者も、オリエンタリズムがからみついた「創られた伝統」という側面については、ほとんど無自覚であるが〔ましこ 2002a〕）。

文学でいえば、英米語に翻訳されることだろう。英米語に翻訳され英米系ほかの文芸評論家に論評される機会をえなければ、ノーベル賞の推薦などないといってよからう。

- (11) こういった術語の決定的な無力さの例としては、言語学での「方言」概念や、社会学での「身分」「階層」などがある。なかでも言語学の「方言」は価値序列をいっさい排した中立概念のはずであったが、近代社会＝国民国家内での教育政策の負の遺産もあって、「なまった地方語」という差別イメージをぬぐえずにいる。まさに「言語」という上位概念の内部の「下位概念」こそ「方言」だったはずなのだが。その結果、言語学者は、「変種 (variety)」といった、いいかえにおこまれたが、これが大学外で啓発効果をもったことはほとんどない。方言概念の政治性については、〔田中 1981〕〔ましこ 2002b〕。

- (12) いままでこそ「死語」化した「舶来物」ということばほど近代日本人の劣等感を象徴することばはなかろう。それは、現在も「インポートもの」といった表現をとめないながら、ヨーロッパ産のブランド商品の最大の消費地＝崇拜者の集住地が日本列島であるという事実としてひきつがれている。広告モデルおよび「ネイティヴの英会話教師」に、ヨーロッパ系ないしは、その血をひいた日系が多用されることも、同様の心理機軸の産物である〔ましこ 2000, 2001a, 2002b〕。ちなみに、ワインは充分大衆的になったが、もともとヨーロッパでは、ソムリエなどを配した高額市場以外では「高級文化」などではない。彼我では「高級」概念におおきなズレがある。パリなどを羨望していた日本人のおおくは、画家はベレー帽をかぶっているといった勘違いをしでかし、ごく一部の人気作家以外画商にほんろうされる職人でしかない（＝冷酷な階級差別下の芸術家たち）という現実も認識できずにいた。それは、音楽家やバレエ・ダンサーなどをふくめた大半の芸術活動にあてはまるといえよう。要は、西欧の貴族／ブルジョアのための商品生産こそがアートの大半であり、その大衆化こそが欧米の現実であったのだが、それを「直輸入」した日本人のおおくは欧米での階級差を認識できず、すべてを「高級文化」として誤認＝受容したわけである。古典音楽にしても、高級／大衆の明確な対比、すみわけが厳然とあることについては、ブルデューらの冷酷な分析でも明白なのに〔ブルデュー＝石井訳 1990〕。

また、正式な用具とグラウンドでおこなわれるものが中等教育以上であった第二次世界大戦前は、野球も高級文化に属していたなど、時代による変動もみのがせない。その点、乗馬やヨットなどは、球技の用具やフィールドとちがって、大量生産や空間の共有が困難だから、大衆化がすすまないであろう。

- (13) もちろん、文化資本のなかでもアカデミックな生産物＝消費財の生産／流通／消費過程は、生産者／消費者の経済階級／階層とかならずしも直結しない。たとえば地方都市の大学に勤務する実直な研究者は、自分の専門分野に関してだけ、ぜいたくな消費水準でとすかもしれないし。図書館などをのぞけば、実質的に数十人の真の読者のみを想定した学術書もかかっているであろう。公的な助成金なしには刊行／購入されえない刊行物もあり、その意味で、資本主義的な「市場」といえるかどうか、微妙なところではあるが。

- (14) こういった文化現象の典型として、マンガ／アニメーションをあげることができよう。生産者がアカデミー式の養成過程をへないことはともかく、「しろうと」でないことはあきらかである。セミ・プロないし「インディーズ」にあたる「コミケ」の生産者も、しろうとの「趣味」の域はしばしばこえていて、ある意味巨大な「市場」を形成している。また、欧米がディズニー・アニメなどを典型として、こどもむけ絵

本／童話のマルチメディア化にとどまってきたのと対照的に、手塚治虫作品や宮崎駿作品をはじめとして、SF ほか文学作品に準ずるあつかいをうけるにいたった日本の状況は、世界化しつつある。たとえば日本マンガ学会（事務局：京都精華大学）といった学術研究団体が成立したのも、ある意味当然といえる（<http://www.kyoto-seika.ac.jp/hyogen/manga-gakkai.html>）。コンピュータ・ゲームについても同様のことがいえる。

- (15) それに対して「純粹芸術」は、大学などにコシをかけた「レッスン・プロ」、ないしは古典芸能保護政策にまもられた継承者にだけゆるされた生産様式である。ある意味、純粹な市場とはいいがたい（注13参照）。
- (16) むろん、ギャンブルをめぐる諸現象を文化として記述分析する姿勢は貴重であるし〔谷岡／仲村編 1997〕、市民ランナーや「緑台将棋」、カラオケ、学生演劇、といった市井の人物の「文化的行動」を対象化すること自体、マイナーともいえるのだが、本論考では、それ以上の水準を要求している。
- (17) それこそ風俗／一時的流行／低俗文化などとしてアカデミックな空間でとりあげるのとはばかれる、あるいは当然のように無視／抑圧されたきたものを列挙しただけでも、性風俗、オタク文化、女子高校生文化をはじめとする「少女文化」など、おおくの社会現象をあげることが可能である。これらの現象の大半に共通するのは、セクシュアリティや劣等感などがからまることで、もともと公然とかがはばかれる領域にある点、パフォーマンスが実践されるにしても秘密裡、ないしは極私的に展開される点、病理現象などが社会問題化したときに、急に識者がしたりがおで分析してみせる点などである。
- (18) 冷静にかんがえれば自明のことだが、以上のような「保守的」な文化観にたつということは、人類学／社会学／教育学などが自明視する「文化」概念を事実上否定するものにほかならない。この点に関しては、現実主義的には現状をあいまいにしたまま放置し、たがいの共存をはかっておいたほうが精神衛生上このましいが、科学社会的には、かなりやっかいな政治性をおびていることも否定できない。というのも、既存の文化研究の価値を自明視することで、サブカルチャーなり大衆文化を蔑視する態度を堅持するかぎり、既存の文化研究は、なにゆえ正統な学問体系＝姿勢なのかという政治性をといかえされるはめになるからである。つまり、「新参者」を差別し、制度化を邪魔するような姿勢にしがみつくとことは、既存の学問体系や知識人の姿勢の政治性という、やっかいな問題をあぶりだすという意味で、まさに「やぶへび」なのである。こういった学問の政治性は、予算／人材配分の正当性はもちろん、講義科目存続の正当性自体がとわれる次元にまで、実はたちいたりかねない。これとほとんど構造的にかなざる、いわゆる「学際分野」の政治性については、〔ましこ 2003〕参照。
- (19) 家政学科などの名称は「生活科学科」「生活環境学科」「生活文化学科」などへとかわったが、その在籍生と教員の中心が女性であることは、うたがう余地もない。しかも、そういった「生活科学」などを権威化している知的源泉は、栄養学（農学研究科）、建築学（工学研究科）、材料学（理学研究科／工学研究科）、経済学／法学／社会学などであり、抽象度のたかい領域になるほど、男性研究者が急増するようである〔朝日新聞社 1998〕。要は、衣食住の実務的技能を理論化する分野を中心に女性研究者の再生産がおこなわれ、それを統括する抽象度のたかい領域ないし学際的領域は、外部から調達される男性研究者によって補充される、という「分業体制」があり、しかも受講生はほとんどが女子学生という知的序列／身分関係が公然化しているのである。中学高校での家庭科の男女共修が定着したところで、科学の威信秩序に変動はなさそうだし、「日常生活」をかたちづくる文化項目は、「主婦」がとりしきる私的領域としかあつかわれなままといえよう。それらは、「家庭科」が「家政科」の入試科目にさえいれられないこと、新聞の「家庭欄」がもっとも「内部」とじこまれて、あからさまに軽視されているらしいことにも、端的にあらわれている。
- (20) 産科医で医学史家の杉立義一は『お産の歴史』のなかで、世界中の出産の多様性を意識して「出産文化」と表現している〔杉立 2002：16〕。杉立はこの表現をみちびくまでに、サル類の出産の諸相と比較することでヒトの難産のカラクリを概説している（「序章 ヒトとサルの出産」）。要は、進化論的な視座から出産を論じているわけだ。しかし、生命科学をまなびながら、サル類にはなぜ「出産文化」が存在せず、なぜ人類にはあるのか、といった根源的な死角がぬけおちていることは、いなめない。また、「われわれ日本人も長い歴史のなかで、独自の出産文化を生み出してきた。本書では、縄文時代から二十世紀末までの日本

人の出産文化について、さまざまな文献史料等を参照しつつ、……」と、俗流日本人論を展開してしまう [同上]。遺伝子情報が連続しているからといって、「日本人」とひとくくりにはできないことは、いうまでもない [ましこ 2002a, b]。

ジェンダーをめぐる悲喜劇は [ましこ 2000] 参照。

ちなみに、遠藤寿一は、性差と文化についての興味ぶかい議論を展開しているが、ジョン・マナーらの見解をほとんど無批判に踏襲している [遠藤 2000: 197-9]。しかし、それは人権蹂躪をともなった人体実験をもとにしており、理論的にも破綻したとみなされていることへの言及がないのは、まずかろう [コラピント=村井訳 2000]。性差/性意識が性染色体や性ホルモンだけで決定されるものでないことはたしかでも、マナーらの研究の問題性は依然のこののだから。

- 21) この社会学者は、その直後で、サブカルチャーとしての老人をとりあげており、そこでは、相当広範囲にめぐりがされており、きわめて対照的といえよう。
- 22) 数字などの「語呂あわせ」は、例外的に「創られた伝統」ではなく、歴史的にねづよいヤマト文化のひとつといえる。複数の漢字のヨミが常態化しているという日本列島の特殊性なしには、ありえなかった現象といえよう。また「マスコミ」「ゼロベア」「パソコン」など4音短縮語も、同様に歴史貫通的なねづよい言語現象である（おそらく、2字漢字語の音よみが背景にある） [窪蘭 2002]。「顔モジ」も漢字表記のうちの象形モジの伝統なくして、発生/意義は理解できまい。「2ちゃんねる」用語としての嘲笑語のひとつ「藁（＝「わらい」の略称）」は、漢字表記の同音異義語なしにはありえない現象である。管見では、これらはいずれも本格的な社会言語学的分析がなされたことはないし、体系的な日本文化論としてもないとおもわれる。これこそ、「ヤマト的」文化現象＝伝統なのに。
- 23) 言語学者の大半が、こういった言語現象を、下世話なこと、瑣末なこととして、学術研究の対象から当然のようにはずしてきたことはいうまでもない。
- 24) [窪蘭 2002] や、理念上の標準語および女性語を「役割語」という視座から分析してみせた [金水 2002] などをふくむ、くもって知りたい！ 日本語 シリーズ (岩波書店) は、その意味でもいい企画といえよう。
- 25) 「学校文化」という用法は教育学/社会学関係では、ごく一般的なものである。あまり一般化してはいないが、より抽象度のたかい用法として「教育文化」がある [宮澤 2002]。たしかに、教育的な関係性/過程は、学校にかぎらないし、そこに歴史性/地域性という独自な変種がみとめられるのだから、より包括的概念といえよう。
- 26) 法社会学を中心に、「法文化」「法意識」といったテーマは再三議論されてきた。
- 27) 精神科医である中井久夫は、「治療文化」という概念さえ提起している [中井 1990]。
- 28) 構造主義があきらかにしたとおり、個々の構成単位が物理的にどうであろうと、それは本質的ではない。要素がふくまれる文脈や体系内での位置づけが価値をきめるのだ。起源が同一でもまったく異質な機能をはたす文化項目もあれば、起源がちがっても同類の機能をはたす文化項目もありえる。たとえば中国大陸と朝鮮半島/日本列島上での漢字体系の意義は前者であり、葬儀をとりしきる牧師/僧侶の役割は後者である。生物学上の概念である「相同器官」(ヒトの両腕とトリの翼のように、発生的には共通でおなじ構成をもつ器官)と「相似器官」(コウモリとトリの翼のように、発生的にも構成上もことなるのに機能と形態がにている器官)が、たとえとしてよかろう。

参考文献

- 赤川 学、1999、『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房
朝日新聞社、1998、『AERA MOOK 生活科学がわかる。』
あべ・やすし、2002、「漢字という障害」『社会言語学Ⅱ』『社会言語学』刊行会
荒井一博、2000、『文化の経済学』文芸春秋
生松敬三、1968、『『文化』の概念の哲学史』、鶴見俊輔/生松敬三編『岩波講座哲学Ⅷ 文化』
伊藤直樹、2000、「文化概念小史」、文化論研究会編『文化論のアリーナ』晃洋書房
伊那正人、1999、『サブカルチャーの社会学』世界思想社

- 上杉正幸、2000、『健康不安の社会学』世界思想社
- 上野俊哉／毛利嘉孝、2000、『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書房
- 海老坂武、1986、『雑種文化のアイデンティティ』みすず書房
- 遠藤寿一、2000、『〈性と文化〉の理解に向けて』、文化論研究会編『文化論のアリーナ』晃洋書房
- 荻野美穂、2002、『ジェンダー化される身体』勁草書房
- 小野芳朗、1997、『〈清潔〉の近代 「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ』講談社
- 加藤秀一、1998、『性現象論』勁草書房
- 岸田 秀、1982、『ものぐさ精神分析』中央公論社
- 金水 敏、2002、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 窪菌晴夫、2002、『新語はこうして作られる』岩波書店
- ゲーレン, A., = 亀井裕／滝浦静雄他訳、1970、『人間学の探究』紀伊國屋書店
- ゲーレン, A., = 平野具男訳、1985、『人間 その本性および世界における位置』法政大学出版局
- コラピント, J. = 村井智之訳、2000、『ブレンダと呼ばれた少年—— ジョンズ・ホプキンス病院で何が起きたのか』無名舎
- 佐藤純一／池田光穂／野村一夫／寺岡伸悟／佐藤哲彦、2002、『健康論の誘惑』文化書房博文社
- 杉立義一、2002、『お産の歴史』集英社
- 高岡 健[編]、2002、『学校の崩壊』批評社
- 田中克彦、1981、『ことばと国家』岩波書店
- 谷岡一郎／仲村祥一編、1997、『ギャンブルの社会学』世界思想社
- ド・セルトー, M., = 山田登世子訳、1990、『文化の政治学』岩波書店
- 中井久夫、1990、『治療文化論』岩波書店
- ブルデュー, P., = 石井洋二郎訳、1990、『ディスタンクシオン I・II』藤原書店
- ホイ, S., = 椎名訳、1999、『清潔文化の誕生』紀伊国屋書店
- ポルトマン, A., = 高木正孝訳、1961、『人間はどこまで動物か—— 新しい人間像のために——』岩波書店
- ましこ・ひでのり、1998、『障がい者文化の社会的意義』『解放社会学研究 12』
- ましこ・ひでのり、2000、『たたかひの社会学』三元社
- ましこ・ひでのり、2001a、『『肌色』と『色盲』』『八事』No.17
- ましこ・ひでのり、2001b、『増補版 イデオロギーとしての「日本」』三元社
- ましこ・ひでのり、2002a、『日本人という自画像』三元社
- ましこ・ひでのり、2002b、『ことばの政治社会学』三元社
- ましこ・ひでのり、2003、『社会科学の射程＝境界線再考：狭義の社会科学と広義の社会科学』『社会科学研究』第23巻第1号
- 宮澤康人編、2002、『教育文化論』放送大学教育振興会
- 吉見俊哉、2000、『カルチュラル・スタディーズ』岩波書店
- 吉見俊哉編、2001、『カルチュラル・スタディーズ』講談社
- 米山公啓、2000、『「健康」という病』集英社
- ラプトン, D., = 無藤隆／佐藤恵理子訳、1999、『食べることの社会学《食・身体・自己》』新曜社